

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム「渋谷ラジオ」

令和56年度番組「展覧会のあと」

ゲスト4: 下町レトロに首っ丈の会さんとおかんアーティストの皆さんをお招きした回のうち、#13のテキストです。

○河原 皆さん、こんにちは。東京都渋谷公園通りギャラリーは、音声コンテンツを配信するプログラム「渋谷ラジオ」をお送りしています。ギャラリーの学芸員が気になるテーマを設定し、作家や専門家に限らず、様々な人の生の声を伝えます。

令和6年度は「展覧会のあと」と題した番組をお届けします。これまで当ギャラリーで開催した展覧会において出会った作家や施設関係者をゲストに迎え、お話を伺っていきます。

今年度の番組「展覧会のあと」のナビゲーターを務めるのは、東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員の河原功也です。

そして、配信の第4弾のゲストは、2000年代初頭から「おかんアート」と呼ばれてひそかに注目されてきた、婦人たちの作る手芸作品を紹介した「Museum of Mom's Art ニッポン国おかんアート村」にて、ゲストキュレーターの一人として展覧会を企画した下町レトロに首っ丈の会さんとおかんアートチームの皆さんです。よろしくお願いします。

○一同 お願いします。

○河原 まずは、下町レトロに首っ丈の会さんに、簡単に自己紹介をしていただきまして、これまでの活動について伺いたいと思います。それでは山下さん、お願いします。

○山下 はい、下町レトロに首っ丈の会は、2005年の5月に結成しました。まあ口癖といいますか、会長のモットーが「めちゃくちゃしたったらええねん」ということで、このテーマをモットーに活動してきました。

月に1回、「下町遠足ツアー」というのをしながら活動してきたんですが、2009年11月に「第1回ダンパ&おかんアート展」というのをしました。その後、毎年おかんアート展を開催しまして、2010年の12月に「第2回ダンパ&おかんアート展」、2016年から名称を「おかんアートとハンドメイド展」に変更しまして、若い作家さんたちも参加するようになりました。2018年の11月には、第10回展を開催しました。その後、また「おかんアート展」という名前が変わりまして、現在までおかんアート展というのを続けてきました。

こんな感じになります。

○河原 なるほど。もともと下町レトロに首っ丈の会さんというのは、どういう活動をしてきたんですか。

○山下 そうですね、神戸市兵庫区和田岬というところで活動しているんですけども、淡路屋という駄菓子屋を営んでいる伊藤さんと、一級建築士で建築事務所をしている山下の2名で結成しまして、下町の面白い場所だったり、面白い人を発掘するという、発掘して紹介するという町歩きツアーをしていまして、そのツアーを毎月開催していき、下町レトロ地図という地図も、今もAmazonで販売しているんですけど——あつ、Amazonでは販売してなかったです。淡路屋で販売しているんですけども。(笑) すみませんね。それで、下町の魅力を発信するみたいなツアーを開催したり、地図を作ったりしていました。そのツアーで巡る場所でおかんアートと出会って、それでおかんアートを作っている方って誰なんだろうというのを発掘していく中で、今日集まってくださった皆さんと出会えたということになりますね。それで、おかんアートの本を作って、それが今Amazonでも販売されているんですけども。(笑) おかんアートの本を作ったりとか、おかんアート展というのをずっと毎年やっているという感じになります。

○河原 ありがとうございます。じゃあ、ちょっとおかんアートとの出会いのことも、この後、後ほど少し聞きながら、皆さんとの出会いもせっかくなので聞いていきたいと思います。

○山下 お願いします。

○河原 それで、今回のトークのテーマをお伝えします。「展覧会のあと」というテーマの「あと」というのは、音で聞くといろんな「あと」という文字が思い浮かぶと思うんですけども、幾つかの「あと」という意味を今回はイメージして名前をつけました。

一つが「痕跡」ですね。英語だと「trace」。足跡とか、スキーで滑った後の線ができるシュプールとか、そういう跡の「あと」ですね。

もう一つは「印」「mark」。自分の印をつけていくような、そういった「あと」。

そして、一番思いつくかなと思う「その後(ご)」、「その後(あと)」、「later」とかいう意味の「その後」。あるいは、「背後」「behind」。その背景にあるものとか下準備とか、そういう背景を語る意味でも「あと」というふうな言葉が使えるかなと思って、展覧会を起点に、何が起きて、その後どうしていったかみたいなことをちょっと具体的に皆さんとお話しできたらなと今回は思っております。

では、まず、おかんアートを下町をツアーしながら見つけていったということを先ほどお話しされていたんですけども、どういった出会いで、おかんアートってそもそもどういうものなのかというのをちょっと教えていただけますか。

○山下 伊藤さんと私との二人でツアーで巡るところというのが、基本的に個人商店と町工場とおうちというところなんですね。そういったところに必ず同じようなものが、手芸作品が飾られていて、これ何なんだろうという、そこからいろいろ調べていくと、どうも当時の2ちゃんねるというところにスレッドがあって、そういうおばあちゃんとかお母さんの作った手芸作品をおかんアートと呼んでいるようだ。それを、それぞれおうちにあるのをアップして、めで合うという非常に温かい、そういうスレッドがありまして、それをずっと私たちよく見ていたんですけども、そのときに初めておかんアートという言葉を知るんですけども、70年代から80年代にかけて、これは尾本さんに後から聞いてもらったと思うんですけども、ハマナカ手芸店とかいろんな手芸の会社がキットを作るんですね。その手芸キットは簡単に作れるように販売されて、それをみんなが作って、またほかの人に教えて広まっていくということで、結構共通したものがいっぱい町だったりいろんなところに出没するのはそういう意味だったりしまして、そういう簡易な手芸作品のことをどうもおかんアートと呼ぶということが分かりました。

○河原 なるほど。だから、いろいろ見ていくと、同じようなものが店頭とかおうちの玄関とかに置いてあって「何だろう、これは」というところから、まず。

○山下 はい、そうです。

○河原 最初は、もしかしたら気に留めていなかったけど、だんだん刷り込まれていくような感じで、気になってしまったというか、そういう感じなんですか。

○山下 そうですね。それで、何か実際、家にもあるみたいな感じで。「家にもある」ってびっくりしたりとか。

○河原 あっ、山下さんのおうちにあったっていう。

○山下 家にもたくさんありました。びっくりしましたね。それまであまり気にもしなかったんですが、おうちにありまして、みんな近所のおばあちゃんとかが下さったりとかして、いっぱい下さるのでどうしようかなと思っていた、まさにそれがおかんアートと呼ばれているものなんだなというのに気づきましたね。

○河原 その気づきから、今ではおかんアート展をやるまでに発展してきているんですけど、まず最初のダンパ&おかんアート展が2009年に始まると思うんですけど、その2005年の結成から2009年までの間に、もう皆さんとは会われている感じですか。

○山下 お会いしてないですね。

○河原 まだ会っていない。

○山下 はい。このときはまだ、おかんアートに気づき出したのが2007年ぐらいだったので、2005

年から2007年は、もう本当にツアーでレトロなもの、下町のレトロなものという、まあ仮の名前ですよ、そのままのものを伊藤さんといつも発掘していたという感じです。

それで、2007年にちょっと気になり出して、伊藤さんはあれなんですね、フリーマーケットというのですか、それに行くのがすごく好きで、軍手の、あのおかんアートの本で人形が表紙になっているんですけど、あれは色違いがあって、赤と青と黄色いのがありまして、あれを伊藤さんが買ってきて、「これ、どう思う」って。(笑)

○河原 (笑) 突然。

○山下 「これ、どう思う」って。「これやんね」と私も言って、「これ、ほかのところにもあるよね」という話で、「ツアー行くところにあるよね」と言ったら、「そう、気になったから買ってきたんやけども、これ、どう思う」という話になったという。

○河原 なるほど。

○山下 だから、あれが表紙になっているというのは、そういうことなんですね。「これ、どう思う」というところからスタートというか、伊藤さんが。

○河原 そうか、二人の何か共通の気になっていたものがあの表紙に、白い猫のキャラクターのやつですね。

○山下 遠回しに言うとそれなんですけれども、伊藤さんが見つけてきたんですね。それをフリマで見つけてきたという。

○河原 そこで、伊藤さんが持ってきて、「これだ」ってなって、そこからどう作者の人と出会っていくのかなというのがすごく不思議なんですけど。

○山下 そうですね、私たちのツアーでは、作品には出会えるんですけど、作っている人が分からないんですよ。だから、今でいうとおかんアート展の「あと」という、そのあとというか、背後に誰がいるのかというのが分からないので、発掘するんですね、作家さんを。それで、ツアーで巡ったところにあるわけなので、そこのお店だったらお店の店主さんに、例えば「これ、誰が作らしたんですか」とか、「これ、どうしたんですか」と言ったら、お店で自分で作っている人もいれば、お客さんが持ってきてくれるとかもあるし、置いて販売しているという人もいるし、なんです。だから、それぞれ見つけたところのあるじの人に聞いて、発掘を始めて、そこから玉突きでずっと発掘していくことをしましたね。

○河原 なるほど。それで、じゃあ紹介していただいた人のおうちとかに行って。

○山下 行くんです。伊藤さんと行って、何か「邪魔するで」みたいな感じで。

○河原 (笑)

○山下 がらがらと開けて、「ここにおかんアートあるか」みたいな感じで借りていくんです。

○河原 (笑) なるほど。道場破りみたいな感じで、がらがらと行って。

○山下 そんな感じで、がらがらと行くんですよ。伊藤さんも、もうどこでも扉開けはるんで。(笑)

○河原 すごく、結構、度胸が要るというか。

○山下 ナチュラルにされますね、伊藤さん、それ。

○河原 できそうな方ですね。

○山下 (笑)

○河原 後ほどまた伊藤さんには来ていただくんですけども。

○山下 ナチュラルにされていました。

○河原 なるほど。それで、今日来ていただいている方で、一番最初に出会った方というのは誰になるんですか。

○山下 一番最初は尾本さんになりますね。

○尾本 一番古いかな。

○山下 はい、尾本さんです。

○河原 じゃあ、尾本さんもどこかのお店とかで見た作品があって、紹介していただいて出会ったと。

○山下 尾本さんは、私、直接ではないんですよ。

○尾本 私はヨマスさんから紹介されたから。

○山下 そうですね。おかんアートのアーティストさんって、第一世代、第二世代ってあるんです。その第一世代の中に香坂巨匠も入っておりますし、あとヨマスさんという、もう絶対会ってほしかったという非常に最強キャラのお母様がいらっしゃる、おかんアーティストさんがいて。

○河原 へえ、ヨマスさん。

○山下 ヨマスさんですね。ヨマスさんが、実は尾本さんのお勤めだった手芸店の超顧客さんでいらっしゃるって、それで声をかけてくれたんですね。だから、第一世代からつながっている方ばかりなんです、ほぼ。ツルヤのおばちゃんもそうですね。ウエダさんという、ツルヤという瓶ジュースの、ネーポンという瓶ジュースがあるんですよ。中島らもが「これ飲んだら天国に行ける」って書いてあった。

○河原 おいしいジュース。

○山下 うん、おいしいジュース。そのネーポンを手作りで作っていたウエダさんというおばちゃんがいまして、その瓶ジュースの工場を畳むときに、そこがおかんアートサロンに変わったんですよ。

いつかおかんアートサロンってあったんですよね、神戸に。その工場跡のおかんアートサロンに、たまたま前を通りかかられたのが西村さんだったり。

○河原 あっ、たまたま。

○山下 たまたまだったり。

○河原 それで入られたってということですか。

○西村 家から近いんで、ちょうど盆踊りを見にいくときに前を通って、何屋さんやろなと思いながら、最初は何か喫茶店みたいな、お茶を飲むみたいな感じで、それで主人と盆踊りに行って、帰りに喉が渴いたねということで、それで寄って、そうしたら、主人はそういうことに興味がないから分からないんで黙って飲みよったけど、私は興味があるもので、いろいろざっと見て、それでゆっくり見られへんから、また改めて、家帰って、また行って。それで、ちょうどまだね、これだけほどしか開いてないねん。

○山下 シャッターが閉まって。

○西村 その上をカーテンみたいな……

○河原 へえ。

○山下 カーテンが。うんうん。

○西村 だから、こんなしてのぞいて。

○一同 (笑)

○河原 そんな少ししか開いてなかったんですか。

○西村 そうそう。それで、ここに横になる感じで、何が入っとんかなみたいな。

○一同 (笑)

○河原 のぞいていたんですね。

○西村 そうそう。気になって。

○河原 へえ、すごい。

○西村 ほんで一遍また帰って、改めてまた行ったら、ちょうどこのぐらい開いとって。

○河原 まだちっちゃい隙間ですけど。

○西村 そう、これだけ。それで、ウエダさんがちょうどいたもので「すみません」言うて、「ちょっと何かいろいろ置いてあるんですけど、こないだから気になっていて、ちょっと見せてもらえますか」言うて、「はい、どうぞどうぞ」言うて開けて、ちょっと入れてもらったら、もういろんなもんが置いてあって、それでも私のちょっと興味があるのだけ材料がちょうど皆そろって、それで一個ずつ買って、持って帰って。めがね置きとか。(笑)

- 河原 ああ、ありましたね。
- 西村 そうそう、「あれ」もあったから。それでいろいろ買って、ちょっと持って帰って、やりました。
- 河原 「あれ」で伝わるのがうれしいですね。
- 西村 それで、山下さんと一緒に来たのかな、一遍、家に。
- 山下 あっ、そうですそうです。私は……
- 西村 京都に一遍、ウエダさんが、何か近くに誰かがしているということで、山下さんに連れてきてもらって、ちょうど私も「趣味の家」という店を自分の家の中ではないかと思って、近所の人が見るぐらいの、私の友達も皆宣伝して、皆、がっつ、最初の頃はもうすごい皆さん来てもらって。
- 河原 へえ。
- 西村 そやから、もう、ちょうど私も難聴者のほうの、聴覚障害者の皆手芸習っている、通訳さんから生徒さんから皆来てくれて。もう団体で来るから、主人がトイレ行こうって行っても行かれへんから。(笑)
- 一同 (笑)
- 河原 お部屋にみんなぎゅうぎゅうって感じで。
- 西村 そうそう。それで、みんなに買っていただいて、ちょうど私の友達やって、ちょうど先に来ていたから、「ごめん、ちょっと計算して」言うて。(笑) それでしてもらってんけど。
- 河原 へえ。
- 西村 ウエダさんはそのきっかけで、そうしたらもうそのおかんアートがあるからということで、ちょっと自分の思ったことを書いて、それを出さんなあかんかったけど、「そんなん、私、書くの苦手やから」「いい、いい」言うて、「まあ何でもいいから書いて」ということで、書いて渡して、それで、それからが始まり、私のおかんアートは。
- 一同 (笑)
- 河原 なるほど。のぞいたところから始まっているという感じですよ、それは。何か気になったっていう。すごいな、その探究心というか、何か結びついたんですね、多分、そこで。
- 西村 いろいろ、でも、入ってもすごく、最初やから初めての人ばかりでしょう。
- 河原 そうか、皆さん初めましての。
- 西村 それで、まず一番に知り合ったのは尾本さん。尾本さんと、今は亡くなったオオマチさんとか、それから香坂さんとか。
- 山下 そうやね。
- 西村 最初の頃はな。あとは皆、折り紙折っている人やいろいろと、三宮ってところが最

初やったから、私は。

○河原 第二世代になるわけですかね。

○山下 第二世代なんですね。第一世代はもうウエダさんとか。

○河原 巨匠たちがいる。

○山下 巨匠、ヨマスさん、香坂さんとかね。

○尾本 私は、ヨマスさんと香坂さんと私と3人で、今、喜楽館いうて新開地に落語の寄席をするところができているんですよ。あその場所で私たち、香坂さんと私とヨマスさんとお店を出していたんです。

○河原 お店。

○尾本 お店。こんな机一つ出して、手作りのものを売っていたんです。

○河原 へえ。

○山下 月に1回。

○尾本 月に1回。それがどれだけ続いたか忘れたけど。

○西村 そやけど、3人やったよね。

○尾本 初め3人やった。

○西村 3人しかいなかったね。

○尾本 ヨマスさんが、香坂さんを連れて、私を連れて行って、3人で始めて。

○山下 初めですか、そうか。

○尾本 そこへアキモさんもちよつと来ていて。

○山下 来られて、それで4人になったのかな。

○尾本 そうそう。

○河原 そのお店をやりながら、何か情報交換したりするんですか。これはこうやって作るんだよとか。

○尾本 それはありますよね。そこで、通りがかりの人がこれを教えてほしいとかもありましたし。

○河原 通りがかりの人が来るんですか。

○尾本 はいはい。

○山下 それがナガオさんだったりでしたっけ。

○尾本 そうそう、その次、ナガオさんも誘って。

○山下 そうかそうか。

○河原 すごいな。何か野の芸術家というか、そういうふうにごんごん出会って行って、教えたり教



えられたりというのをしてきたわけですね。

○山下 そうそう。

○河原 お二人とも、だから、尾本さんも西村さんもお店をやっていた……

○尾本 道端いう感じでしたけどね。

○山下 そうなんですよ。何か空き地ですよ。空き地にテントを張っていて、それで、そこの中をヨマスさんが何か使っていていよって言ってもらって。

○尾本 靴屋さんに声かけて、靴屋さんの許可を得て。

○山下 されていたんですよね。だから、ヨマスさんはどっちかというプロデューサー的な。

○尾本 (笑)

○河原 へえ、なるほど。

○山下 ね、そうですね。イベントプロデューサーみたいな。

○河原 それは皆さん、だから、おうちで作っていたものとかをちょっと外に出したり、見せたいとか、そういうのもあって、ちょっと置く場所を自分で探したり、人に聞いたりとか、そういう自分から動いたというのがあるんですよね、それは。

○尾本 まあヨマスさんが「売れる売れる」言うて。

○河原 ああ、そうか、プロデューサーがいたのか。

○尾本 そうそうそう。

○山下 そうか、ヨマスさんが「売れる売れる」ってもし言っていなかったら、尾本さんの的には。

○尾本 行っていない。

○山下 じゃあ、ヨマスさんの言葉って、めっちゃ重要なんですね。

○尾本 そうそう。

○山下 「これ売れるよ」って言ってくれたんですか。

○尾本 あの人自身も、私のも香坂さんのものいっぱい買って、配ってくれはった。

○河原 すごいですね。

○山下 ヨマスさんは、だから、どちらかという、何かほかの人のものも買って、配ってくれていましたよね。

○尾本 そうそう。

○西村 私も、家に来てちょっとだけ買って、どっかにあれする言われて、少し持って帰らはった、買って。

○山下 ほお。ヨマスさん、何かすごい……

○西村 それで、そこから、尾本さんと新開地でやっているから西村さんおいで言われて、出したらいよいよ言われたけど、「いや、私出すもんないわ」って言うて、それで一回見について、そしたらちょうど3人いてはって、この寒いときに。(笑)

○尾本 そうそう。(笑)

○一同 (笑)

○新居 寒いときにお弁当を持って行って、寒いところで食べてはったから。

○西村 寒いときやったもんな。寒いのにって。ほんで私、家帰って、毎回あるときには甘酒作って、皆さんに差し入れを持っていった。

○山下 いや、そうやったんや。

○河原 へえ、甘酒。

○西村 うん、そうそう。そんなこともあったわよね。

○河原 かなり地道な、そういうところから皆さんの創作が始まっているというか。なるほど。せつかくなのでほかの皆さんの、だから、まず尾本さんと西村さんが……

○山下 そうですね。

○河原 ほかの第一世代と一緒にोकかんアートを。まだチームとはなっていなかったのかもしれないですけど。

○山下 まだなっていなかったですね。

○河原 それと一緒に……